【30】

氏 名（国 籍）	カノックワン・ラオハブラナキット（タ　イ）
学 位 の 種 類	博　士（言 語 学）
学 位 記 番 号	博 甲 第 1,987 号
学位授与年月日	平 成 11 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	「疑問文文末形式」の研究 －日本語とタイ語の対照－

主 査	筑波大学教授	Ph. D.	草 薙 裕
副 査	筑波大学教授	Ph. D.	岡 崎 敏 雄
副 査	筑波大学教授	博士（文学）	小野澤 正 喜
副 査	筑波大学教授		高 田 誠
副 査	筑波大学教授	博士（文学）	湯 澤 質 幸

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は，日本語とタイ語における疑問表現の文末に現れる「疑問文文末形式」について，それらの意味・用法を分析し，それらの用法が体系性を持っていることを指摘するとともに，両言語におけるそれらの用法を対照的に提示することを目的としている。ここで取り上げた文末形式は，日本語においては，「カ」「カナ」「カシラ」「ナイカ」「ジャナイカ」「ダロウ」「ネ」，タイ語においては，「mǎj」「rǔ:plàw」「rǔ:」「mǎjná:」「rǔ:plàwná:」「rǔ:nî:」「châjmǎj」「mâj～rǔ:」「mâjchâjrǔ:」「ná」の各形式である。これらの形式は，「疑問」という基本的な意味機能を持っていて，それがさまざまな条件によって複数の用法を派生し，それらの用法が互いに体系性を持ったいくつかの用法群に分けられるというのが本研究の基本的な主張である。

本論文は，序論としての第 1 章に始まり，「疑問文文末形式」の体系性を提示するための枠組みの中心部分を論ずる第 2 章，第 3 章，その枠組みを拡大して論じた第 4 章，タイ語についての同様の議論をした第 5 章，第 6 章，そして両言語の対照分析を論じ全体をまとめた第 7 章，第 8 章という構成からなっている。

第 1 章の序論においては，日本語，タイ語のそれぞれにおける疑問表現について広く先行研究を批判的に分析し，従来の研究が個々の形式についての分析については評価できるものの，「疑問文文末形式」全体を見通しての体系的記述において十分ではないとし，その不足している部分，すなわち，体系性という視点から分析を行うという本研究の基本的立場を主張している。

第 2 章，第 3 章においては，上でいう体系性を示すための枠組みの中心部分として通常疑問形式の「カ」を中心に取り上げ，「カ」の基本的意味は「疑念の表示」であるとし，その疑念を形作る条件として，話し手が「命題の真偽確定が不能である状態」にあるという「不確定」，「確定的ではあるが，なお確認作業を必要とする命題の状態」にあるという「未確認」，そして，「聞き手存在の必要性」の三つをあげている。聞き手を必要としない場合を「不向き」，必要とする場合を「外向き」とし，「カ」について，「外向き」の「不確定」用法としての「不定問いかけ（生け花をやったことがありますカ）」，「未確認」の「受容問いかけ（[相手が来ているのをみて] あら，また来たんですカ）」，「内向き」の「不確定」用法としての「不定自問（電話してみようカ）」，「未確認」の「受容自問（ここにあったのカ）」の 4 用法を設定し，それぞれ「A ゾーン」，「B ゾーン」，「A’ ゾーン」，「B’ ゾーン」と名付けている。すなわち，「不確定」を A，「未確認」を B とし，「外向き」を「’」なしで示し，対応する「内向き」を「’」付きで示すというわけである。さらに，「カナ」「カシラ」についても，この枠組み

に当てはめられるとしている。

第４章では，日本語の「ダロウ」を取り上げ，「ダロウ」には，「未確認」の命題を表す「推量」と「確認要求（君はパーティに行くダロウ？）」，「非共有」の命題を扱う「共有認識要求（ほら，あそこに白いビルがあるダロウ。会場はそのビルの中にあるんだ。）」と「認識主張（何をいってるんだ。どちらが買ってもいいダロウ！）」の４用法があるとした上で，あとの二つについて，「非共有」を「命題で表されている知識や理解を聞き手が共有していない状態」ととらえ，これを上のＡ，Ｂに加え「Ｃゾーン」と名付ける。そして，「聞き手と対立する認識がない」「共有認識要求」用法を「ＣＩゾーン」，「聞き手と対立する認識がある」「認識主張」を「ＣⅡゾーン」としその枠組みを提示している。さらに，「否定辞＋カ」を取り上げ，それらが「発話時における命題Ｐについて，～Ｐのとらえかたと Ｐの導入のあり方」の違いによって３タイプ７用法に分けられることを提示し，「否定辞＋カ」の意味を「～Ｐの文脈において，～ＰをＰに変換せよ」であるとしている。そこで，「疑問文文末形式」の枠組みはさらに拡大し，「内向き認識提示」が属する「ＣＩ’ゾーン」と「内向き認識主張」の「ＣⅡ’ゾーン」の二つが加わり完成すると主張している。「ネ」についても，「未確認」の命題を扱う「確認要求」と「非共有」の命題を扱う「共有認識確認」の２用法にまとめられるとしている。

タイ語を扱った第５章，第６章では，タイ語の「疑問文文末形式」も日本語と同様に各用法が本論の掲示する枠組みの中に位置づけられるとした上で，通常疑問形式には否定辞が含まれる形式「mǎj / rǔ:plàw」と否定辞がふくまれない形式「rǔ:」の二つがあることを示し，それにより，従来説明がつかなかった，通常疑問形式テンス／アスペクトの使用制限を説明している。「mǎj / rǔ:plàw」は，「～Ｐ」の可能性に対する配慮が問題であり，その意味は「～Ｐに配慮しながら問いかける」であると指摘し，「～Ｐをどのように配慮するか」によって用法が派生していると分析している。他方，「rǔ:」は，「～Ｐ」の可能性は問題としないが，つねに「発話場面で，ある先行文脈や状況から情報を受け取り，その背後の事情を問いかける」という性質を持つことから，その基本的意味を「背後の事情を問いかける」であると規定している。さらに，自問形式について上の通常疑問形式との関連で分析し，「mǎjná: / rǔ:plàwná:」の意味は「～Ｐに配慮しながら自問する」，「rǔ:nî:」は「背後の事情を自問する」と措定し，確認要求形式「châjmǎj」は「聞き手に確認を求める表示」であるという結論を提示している。「否定辞＋rǔ: 」については，「非共有」と関わる用法を認め，その意味を「発話現場において，意識されていなかったＰという認識を生成するように聞き手に要求する」であるとしている。

第７章，第８章では，両言語の対照を行い全体のまとめを提示している。これまでの各章で，「不確定」「未確認」「非共有」という３要素と「聞き手存在の必要性」の有無との組み合わせにより「Ａ，Ａ’」，「Ｂ，Ｂ’」，「Ｃ，Ｃ’」，「ＣＩ，ＣＩ’」，「ＣⅡ，ＣⅡ’」を加えた各ゾーンを設定してきたわけであるが，ここで，全体を対照し両言語の「疑問文文末形式」の全体像を対照的に提示している。主な結果として，１）日本語の１形式が持つ用法は，タイ語の１形式が持つ用法よりも多く，外向きと内向きの両方にまたがる，２）タイ語においては，外向き用の形式，内向き用の形式という役割分担が日本語に比べて明確である，３）典型的な疑問表現を作る通常疑問形式のグループに日本語は「カ」一つの形式しかないのに比べ，タイ語には「mǎj / rǔ:plàw / rǔ:」の３形式があり，それぞれが特徴的な役割を果たしている，４）とりわけ，「mǎj」「rǔ:plàw」が否定辞を含む形式であることが日本語の「カ」の用法との大きな違いの要因となっている，５）各形式の意味の比較をすることで，タイ語の「疑問文文末形式」は自問形式のグループを除くとすべて聞き手の存在を前提としているという特徴がある，という結論を導き出している。

審査の結果の要旨

本研究は，基本的には「疑問を投げかける」という働きを持ちながら，実際の発話ではさまざまな用法を呈する「疑問文文末形式」について，旧来個別に論じられてきて必ずしもその全体像が明確でなかったことを問題と

して取り上げ，「不確定」「未確認」「非共有」さらには「聞き手存在の必要性」といった要素を設定してそれらの条件の生起，分布によってさまざまな用法をいくつかのカテゴリーに分け，全体像を体系的に示すことに成功していることは高く評価できる。本研究は，基本的には構文論の研究であるが，それぞれ形式について，多くの用例から発話レベルでの用法を分析し，そこからそれぞれの基本的な意味を抽出し，意味のレベルと用法のレベルとを分けて考えるという点では，一般意味論の基本的な考え方をふまえた論証となっており，言語学的にしっかりと筋の通った論議であると評価できる。さらに，日本語とタイ語の対照研究というこれまで先行の研究がほとんどない分野について，個々の形式の細部の用法にまで踏み込んだ分析結果を提示した点も，今後の研究に貢献するところ大であると評価できる。

「疑問文文末形式」とされるものは本論文で取り上げたもののほかにもあり，本論文の結論が分析のすべてではなく，まだまだ残された問題は少なくないが，その不足は本研究の価値を損ずるものではなく，本研究は，学位論文として十分に価値の認められるものとなっている。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。